

南三陸町における廃校活用を通じたコミュニティの再編成

—リベラリズム及びコミュニタリアニズムに依拠した事例研究⁽¹⁾—

Utilization of a closed down school and community reorganization
in Minami Sanriku Town

- A case study based on liberalism and communitarianism -

権 安理

GON, Anri

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the meaning of community reorganization through an examination of the utilization of a closed down school in Minami Sanriku Town, while referring to the theory of Richard Rorty's liberalism and Michael Sandel and Michael Walzer's communitarianism.

All over Japan, owing to the decreasing birthrate and depopulation, more and more primary and junior high schools are being closed down, which means that local communities are weakening. Especially, hard hit areas of the Great East Japan Earthquake are badly affected, but in this difficult situation we can see community reorganization through the utilization of closed down schools. With this in mind, the author analyses the case of YES Factory in Minami Sanriku Town, Miyagi Prefecture that utilizes the building of the former Iriya Junior High School, while referring to Rorty's liberalism, and Sandel and Walzer's communitarianism. Hence this paper has a methodological characteristic that presents their theories in a positive light.

Key words: utilization of closed down schools, community reorganization, Minami Sanriku Town, the Great East Japan Earthquake, Rorty's liberalism, communitarianism

はじめに

文部科学省の調査によると、2002年度から2013年度までに廃校となった公立小中学校及び高等学校等は5,801校である。なかでも東日本大震災の被災地である、岩手県、福島県、宮城県の廃校数は多く、それぞれ233、170、137校となっている〔文部科学省（2011）〕。

廃校の発生は、基本的には少子化による児童生徒数の減少に起因するために、当該地域のコミュニティが弱体化していることを意味し、廃校という施設もしくは建物は、まさにそのことを象徴している。被災地でも震災以前から少子高齢化や過疎化が進展しており、したがって被災地は、被災という特殊な状況と、少子高齢化もしくは過疎化という全国的な問題の双方に同時に直面している、つまりは二重の問題を抱えていると言える。だが、その困難な状況から、廃校を活用することを通じて、コミュニティを再編成していく動向が見られるようになってきた。

ここで「再編成」という言葉を使用したのは、とくに公立小中学校を前提とした学区という地縁共同体＝地域コミュニティの復活ということには還元できない、新しい共同関係が形成されつつあることを示すためである。本稿はこのような関心から、被災地における廃校活用事例——宮城県本吉郡南三陸町の「YES工房（旧・入谷中学校）」——を紹介・分析する。またその際、再編成されつつあるコミュニティの特質について、理論・思想をふまえて明らかにする。

本稿がふまえる理論・思想とは、具体的にはR・ローティのリベラリズムと、M・サンデルやM・ウォルツァーのコミュニタリアニズムである。一般的に、リベラリズムとコミュニタリアニズムは対峙する思想であると考えられている。だが本稿は、震災時から震災後、そしてポスト震災へとという現地の時間軸にそって彼らのテキストを解釈することにより、「残酷さの回避」を目的として生まれる連帯——リベラリズムの共同関係——と、未来に向けて「善／財」を共有していく共同性——コミュニタリアニズムの共同関係——の双方が、現地の状況を分析するために有効な準拠点となり得ることを明らかにしている。この点においても本稿は独自性を持つと同時に、ローティやコミュニタリアニズムの思想を、被災地の調査・研究に応用するという学術的な特色を有している。

1. リベラリズムの共同関係の生成——南三陸町における震災時とその後

1. 震災時の小学校：避難所となった志津川小学校

文部科学省は、2002年に廃校に関する本格的な調査を行い、翌年にはその結果を報告書にまとめた。その報告書には「廃校活用コラム」という欄があり、そこには次のように記されている。「明治以来、学校は地域の最も良い場所に作られてきた」〔文部科学省（2003）p.61〕。ここで言う「最も良い場所」は、もちろん地域によって異なる。文字通り、地域の物理的な中心に位置する場合もあれば、主要な道路沿いに立地することもあるだろう。南三陸で特徴的なのは、多くの学校が高台にあった点である。中心地の志津川地区がこの点において象徴的である。かつての住宅地や商店は海近くに広がっており、小・中・高等学校は山側、つまりは高台にある。

そのような立地の特徴もあり、震災後、志津川小学校は避難所となった。震災直後に高台に避難した約1,000人が、やがて志津川小学校に移り、600人程がそこで避難生活を送った。極寒のなか、民家から毛布が借りられ、さらには学校のカーテンまで使われて寒さ対策が取られた。その際には、高齢者や子どもが優先された。極めて厳しい条件であったが、自治会を中心に避難者の協力のもと、約2ヵ月間に及ぶ避難生活が何とか乗りきられた。現在、YES工房の運営主体である「南三陸復興ダコの会」事務局長の阿部忠義氏は、そのときに「人間は助け合う生き物、復興もまたするのでは……」と思ったそうである²⁾。

ただし、避難所での生活はやはり過酷であり、阿部氏によると次のような問題が顕著になってもいた。第一には、プライバシーがなく居場所が一つしか存在しないこと、第二は、受動的生活が続くことである。震災時には、地域外から多くのボランティアが駆けつけて炊き出しを行ったり、支援物資が各地から届いていた。だがそうであるからこそ、避難所での生活は受け身となる傾向にあり、「張り合い」がなくなってもいた。阿部氏はこの状況を見て、避難所とは別の空間を作ること、またある程度主体的な活動や仕事をする必要があると思うに至る。そしてこのような状況と、阿部氏の思いから生まれたのが、廃校となっていた旧・入谷中学校を活用したYES工房である。

2. 震災後の廃校：YES工房の誕生

1) 廃校活用の状況

ここでまず、東日本大震災に関する廃校活用の一般的な状況に言及しておく、岩手県、福島県、宮城県を除く都道府県の140校が何らかの形で利用された。その多くが「避難所」であったが、なかには「救援物資等倉庫」や「ペットの避難所」となったところもある〔文部科学省(2011) p.61〕。

被災3県では、被災して深刻な被害を受けた学校が復旧せず、「廃校施設等の転用」がなされた「仮校舎」で授業が行われた事例もある〔青木(2015) p.13〕。宮城県における廃校活用事例である「さんさん館」には、震災後に警察が一時的に駐在した。さんさん館は南三陸の山間部にある入谷地区に位置していることもあり、震災の際に深刻な被害を受けることはなかった。また、同館は地域住民の組合が運営する、廃校をリニューアルした宿である。このようなこともあり、全国から来た警察が駐在する場所となった。

2) YES工房(旧・入谷中学校)の誕生

入谷地区にある廃校の旧・入谷中学校は、さんさん館と同様に、震災による大きな被害を受けなかったことから「避難所とは別の空間」に選ばれ、木造校舎がリニューアルされてYES工房となる。そして現在では、地域内外で知られる廃校活用事例になっている。YES工房という名前の由来は、そこがまさに「廃校」であることによる。「YES」が「はい」を意味し、また「工」の音と合わせて「はいこう」となることから、そのユニークな名称が付けられた。名称のユニ-

クさは、工房の名前に留まらない。そこで製造されている作品（商品）の名称にも見られている。

その作品（商品）は、南三陸名産のタコをキャラクター化した「オクトパス君」である。オクトパス君は、タコの形をした文鎮で主に受験生をターゲットにしたものであり、「置くと（試験に）パス」ということに名前は由来している。実は震災前、沿岸部にオクトパス君の工房が建てられていたが、津波で流されてしまった。震災後は「軟派な取り組みはできない」ということで、「『オクトパス君』の製造も含め、タコによる地域おこしの活動は一時封印」されていた〔三菱商事復興支援財団HP〕。だが、先述のような避難所での経緯もあり、2011年5月の第2回南三陸復興市を契機として、オクトパス君の製造が再開されることになった。ただしこの時点では、それは避難所の片隅で3名のスタッフによって行われたものであったが、当日の売り上げは290個にも及んだ。

また、オクトパス君の製造再開には、避難所での経緯とは別の大きな契機があった。大正大学との関わりである。震災後、YES工房がある入谷地区は、大正大学の学生ボランティアを受け入れた。ボランティアを通じた大学、学生との交流のなかで、「オクトパス君の文鎮を復活させましょう」という提案がなされ〔三菱商事復興支援財団HP〕、大正大学が出資することになった。こうして、同年6月には「南三陸復興タコの会」が設立され、翌7月には同会が廃校を活用した工房——入谷YES工房——がオープンした。

郷愁を誘う佇まいである木造校舎をリニューアルした廃校は、まさに避難所とは違う雰囲気を持った居場所であり、仕事・作業に集中して打ち込める場であった。馴染みのある古い校舎・建物に、新しい機械を入れた特色ある空間である。当時の様子は、南三陸復興タコの会会長の高橋修氏によって次のように言われている。「YES工房は、震災で仮設に入った人が、何も考えずに没頭できることがないか探して、文鎮の色塗りだとか、オクトパス君を制作するということから立ち上げたんですね」〔YES工房（2014）p.4〕。何かに集中することは、惨事を一時でも忘れることの手助けとなる。また、オクトパス君を作ることにより、出来栄を気にしたり、工夫をすることに思いを巡らせるようになり、主体性や積極性が育まれる。こうして、廃校という空間を活用した工房において、「生活を取り戻す原動力」が生まれていったのである〔YES工房（2014）p.4〕。

3. ローティのリベラリズムとその応用

1) リベラルな連帯

では、志津川小学校への避難から、廃校（旧・入谷中学校）におけるオクトパス君の製造再開までに至る経緯の意味を、どのような観点から考えることができるのか。もちろん、しばしば言及されるように、大震災や津波、極寒という過酷な状況のなかで形成された共同関係を、「災害ユートピア」の生成という視点から説明することもできよう。R・ソルニットは、災害自体は「基本的に恐ろしく、悲惨で、かつ痛ましい」ものであることを認めつつも〔Solnit（2010）＝（2010）p.17〕、そこから生まれる相互扶助——「災害ユートピア」——に注目すべきと主張する。

興味深い指摘であるが、これとは別の視点から、人々の共同関係——「連帯」——の可能性の条件を考えた注目すべき理論・思想がある。それが、ローティのリベラリズムである。ローティは、「リベラル・ユートピアの可能性」を論じた著書で次のように言っている。

連帯とは、伝統的な差異（種族、宗教、人種、習慣、その他の違い）を、苦痛や辱めという点での類似性と比較するならばさほど重要ではないとしないで考えてゆく能力、私たちとはかなり違った人びとを「われわれ」の範囲のなかに包含されるものと考えていく能力である〔Rorty (1989) = (2000) p.401〕。

ローティが「リベラルな連帯」とも言うべきものを主張しているとするならば、その要は以下の二点である。第一は、連帯の根拠を人間の同質性ではなく、差異性に見ている点である。ローティが批判する伝統哲学は、全ての人間に共通する「自己の核心」のようなものを想定し、それを根拠に連帯が可能であるとする〔Rorty (1989) = (2000) p.395-6〕。大陸系哲学が想定してきた普遍的理性や共通の本質といったものである。だがローティは、そのような超越的な議論を批判して、人間が必ずある特定の歴史的コンテクスト（＝言語ゲーム）に依拠せざるを得ないことを強調する。人間の思考や行為は歴史や文化に相対的であり、それを超えた普遍性はない。この点において、ローティはポストモダニストである。

だが他方でローティは、そのような差異性にも関わらず、何を苦痛や辱めと考えるのかという点については、ある程度の共通性が見られると考えており、これが「リベラルな連帯」の第二の要となる。ローティは「残酷さこそが私たちがなしうる最悪の事柄」ということについては、見解の一致が見られると言う〔Rorty (1989) = (2000) p.410〕。何が最良の事柄であるかについては意見が分かるとしても、「残酷さ」を可能な限り回避したいと考えることについては概ね賛同される。ローティはこのように考えている。

「残酷さ (cruelty)」は身体的な苦痛のみならず、精神的なこと、例えば「屈辱 (humiliation)」とも表現されている〔Rorty (1989) = (2000) 9chap.〕。だがいずれにしても、先の引用にある「伝統的な差異」と比べると、「残酷さ」に対する見解、もしくは「残酷さこそが……最悪の事柄」と見なす点については、人々の間に「類似性」が見られる。したがって、「残酷さの回避」という目的のもとで、他者に対して「苦しいのですね (“Are you suffering?”)」という問いかけをしていながら、協同・共同することができる。その過程で、「We = 私たち」の範囲が広がり、連帯が生まれると言う〔Rorty (1989) = (2000) p.411-2〕。普遍的理性や共通の本質ではなく、他者の生や苦しみに対する関心、感性が連帯を可能にする。

2) ローティのリベラリズムの応用

ただしもちろん、ローティはソルニットと違い、大災害や非常事態における連帯や共同関係を想定して議論を進めている訳ではない。また、ローティは自他共に認めるポストモダニストであ

り、「歴史の背後にある何か」という超越的な想定を拒否するために、やはり「残酷さ」の内容もコンテキスト依存的であるということにはなる。あくまで「伝統的な差異（種族、宗教、人種、習慣、その他の違い）」と比べると、「残酷さ」の内容とそれを回避したいと望む点においては「類似性」があるにすぎない。だがそうであるにも関わらず、ローティの「リベラルな連帯」に関する議論は、南三陸における志津川小学校から旧・入谷中学校に至る経緯の意味を考える際、非常に示唆的である。

このことは二つの点から言える。第一に、「リベラルな連帯」が人間の差異性を前提としている点である。例えば、震災後、「日本人」（の行動）が極端に美化され、相互扶助や共同関係生成の根拠をナショナリズム（のみ）に見出すような言説が発信されたのは記憶に新しい⁽³⁾。このことの是非はここでは問わないが、指摘したいのは、「リベラルな連帯」という想定はナショナリズムとは異なる発想であり、この点において準拠枠として有効であるということだ⁽⁴⁾。

ローティは、人間の差異性を強調する。これが前提であり、思考の出発点である。それをふまえて考えるならば、例えば避難生活を送っていたのは、画一的・同質的な“日本人”ではなく、異なる年齢、性別、体力……といった特徴を持った人々である。日本国籍以外の被災者もいるだろう。東日本大震災という歴史的状況のなかで、ある特定の場所に避難している多様性を有した諸個人である。

ただし他方で、確かにそこでは、被災や避難というコンテキストが「共有」されている。そのために第二に、「残酷さの回避」による連帯という観点が重要になってくる。コンテキストが共有されているために、「残酷さ」に対する共通認識は生じやすい。したがって、他者に対する「苦しいのですね」という問いかけを媒介として、そこに連帯が生まれていったと考えることができる。このような意味で、「残酷さ」の内容はコンテキストに相対的ではあるが、震災時という非常事態においては共通理解が得られやすく、それゆえに「残酷さの回避」を目ざした連帯、つまりは共同・協同関係が生成し得る。

ローティは、「連帯という感情は必然的に、どのような類似性や非類似性が私たちにとって顕著なものとして感じられるのか」に依存すると言っている。そして、「何が顕著なものとして感じられるのか」は、「歴史的に偶然的な終局の語彙のはたらき」に影響されると続けている〔Rorty (1989) = (2000) p.400〕。「終局の語彙」は難しい表現であるが、端的に言えば、人々が“いま・ここ”で依拠している、あるいは依拠せざるを得ないコンテキストのことである。この歴史的偶然性が生み出すコンテキストを、ネーションや文化に限定する必然性はない。むしろ、震災もしくは被災という共有されたコンテキスト＝いま・この状況こそが、同語反復的であるが震災時、避難時、避難生活における（その時点での）「終局の語彙」を生み出す歴史的偶然性であったのではなかろうか。

そうであるとするならば、震災時の志津川小学校から震災後のYES工房におけるオクトパス君製造の再開までの経緯は、「残酷さの回避」のためのコミュニティ——「リベラルな連帯」——が生成したプロセスであったと考えることができる。震災や津波……という「残酷さ」を回避す

るために、高台、避難所へと共同・協同して移動する。そして避難所では、寒さや恐怖……といった「残酷さ」を可能な限り回避すべく、高齢者や子どもを優先した連帯が生まれる。さらに避難所での受動的な生活や悲しみ、不安……といった「残酷さ」を回避するために、単純作業や仕事が求められ、やがて廃校という空間が新たな居場所となっていく。YES工房という廃校活用が開始された契機・経緯も、この点から理解することができるだろう。

Ⅱ. コミュニタリアニズム的共同関係の生成——ポスト大震災状況における展開

1. コミュニタリアニズム的観点の導入

1) コミュニタリアニズムと「共通善」

南三陸復興ダコの会の事務局長であり、YES工房の立ち上げに尽力した阿部忠義氏の言葉を思い起こそう。「人間は助け合う生き物、復興もまたするのでは……」。「残酷さの回避」を目指す「リベラルな連帯」は、この文章の前半部分、つまりは「人間は助け合う生き物」という点を理解するのに極めて有効である。だが他方で、後半部分、すなわち「復興」ということを考える際には、また別の理論・思想が必要なのではなかろうか。

確かに、「残酷さの回避」による「リベラルな連帯」は、震災という（過去の）出来事から派生する「残酷さ」に対応する過程と、そこから生じる共同関係の意味や意義を明らかにするために有効な準拠枠であった。だが復興は、過去はもちろん未来にも関係する。未来を考えるためには、「回避」ということ以上に、何か積極的な方向性を指し示す知見が必要となってくる。I・パーリンの言葉を使えば、「～からの自由」から「～への自由」への転換である。そして本稿が依拠するその知見が、コミュニタリアニズムである。

共同体主義とも訳されるコミュニタリアニズムの詳細な定義や紹介をここですることはないが、それがコミュニティにおける「共通善 (common good)」を志向する思想潮流であるという点は重要である。例えばコミュニタリアンの一人と目されているサンデルは、自らの主張がコミュニティの「共通善」を重視する公共哲学であることを自負して次のように主張している。

まず、「政治に参加」することは個人的な目的の追求「以上のもの」を含意する。それは、「公共的な事柄についての知識、さらには帰属意識、全体への関心、……共同体への道徳的絆といったものを要求する」のだ。したがって、「同胞市民」が「公民的徳」を持ち、共同体／コミュニティへと積極的に関わるのが重要であると言う〔Sandel (1996) = (2010) p.4〕。このようなサンデルの主張に着目すると、コミュニタリアニズムは、徳性や一般意志のようなものを過度に重視しているように見える。

さらにサンデルは、次のようにも言っている。「コミュニティ意識」の形成には、「全体への配慮や共通善への献身」が不可欠である〔Sandel (2009) = (2011) p.411〕。したがって、ここで想定されるコミュニティは個を超越する全体性や道徳的性質を持ち、そのメンバーには同質性やコミュニティに対する忠誠が求められるということになる。またそうであるとして、コミュニタリアニズムは批判もされてきた。

ただしサンデルは、「共通善」についての熟議が必要であるとも主張しており〔Sandel and Kobayashi (2011) = (2011) p.123〕、それをあらかじめ存在するもの（＝先験的なもの）と見なしている訳ではない。だが、「共通善」を「政治的・精神的問題」との関連から考え、「道徳的」なものを見なす傾向はある〔Sandel and Kobayashi (2011) = (2011) p.123-4〕。ただし私見では、「共通善」をそのようなことに限定して考える必要はない。goodは「～にとって善いという意味の形容詞」であるが、とくにそれが名詞化されるとき、意味は複数化される。例えば「道徳的・宗教的」に、つまりは精神に関係する次元で「善い」とされるときには「善」となり、「物質的に善い場合」は「財」となる〔石塚・柴田 (2003) p.185〕。この点に関連して、菊池理夫は次のような指摘をしている。

……「共通善」は、精神的なものではなく、より物質的な「公共財」や「公共の福祉」でもあるが、「大衆の善」として……あくまで「共通の利益」、「共益」としてある。「共通善」を批判するリベラルが述べるように、特定のコミュニティの価値として、個人に強制されるものではなく、また成員資格の問題は残るが……外国人に対しても開かれているものである〔菊池 (2011) ix〕。

「共通善」は、共有される可能性のある価値観であると同時に、共通の利益ともなり得る。また、物質的な財にも関わり得る。そして重要なのは、「共通善」が超越的で不変的なものではなく、多様な可能性や人々に「開かれている」ことである。ローティの言葉を使えば、それは「歴史の背後」にあるものではない。このように考えることもできるだろう。

2) 「共通善」から「共通善／財」へ

この点については、ウォルツァーの議論が参考になる。ウォルツァーは、多様性もしくは複数性を擁護するために、「歴史が示すもの」あるいは「現れの世界」から撤退して、「根源的な単一性を探す」ような「哲学者」を批判する。「哲学者」は、「すばやく単一の財〔善〕へと抽象化される、基本的な財の短いリスト」や、その「配分の単一の基準」を求める〔Walzer (1983) = (1999) p.21〕。この点を逆に言えば、現象の多様性を抽象化するからこそ、「単一の財〔善〕」が想定されることになる。だが、それはあくまで抽象的な理念である。「歴史が示すもの」ではない。「財〔善〕」が現実に具体化されるとき、それは多元的なものとなる。したがってウォルツァーは次のように言っている。

^{ワールド}社会の中における善／財は意味を共有している。それは着想と創出が社会的過程だからである。同じ理由から、善／財は異なる社会では異なる意味をもつ。同じ「物・事」が異なる理由で評価される〔Walzer (1983) = (1999) p.26〕（訳語一部変更）。

good(s)は共有される「善」でもあるが、「分配」され「付与、割り当て、交換」される「財」でもある。そしてウォルツァーは、「善／財の動きを決定するのは、善／財の意味である」と主張する。意味は「善／財」に内在的なものでも超越的なものでもなく、社会的に決定される。つまりは、「善／財」が「どういう意味をもっているのかを私たちが理解する」ことに依存する〔Walzer (1983) = (1999) p.27〕(訳語一部変更)。したがって、例えば非物質的な「善」に関わる「道徳」を考える際にも、それをいかに「解釈」するのかということが重要となる〔Walzer (1987) = (1996)〕。人々に解釈されて理解され得るものだからこそ、「善／財」は共有される可能性——あくまでも可能性である——を持つ。そして、この「善／財」の共有の場合こそが、コミュニティであると考えられよう。そうであるとするならば、「共通善」を次のように定義することができる。

「善」は超越的なものではない。複数の人々が共存している現実のコミュニティで意味として共有される。そして「善」は、コミュニティのメンバーの「着想と創出」から生じるが、他方で物質的な「財」の交換・分配や、共通の利益とも密接に関係する。あるいは逆に、コミュニティにおいて、「財」に基づく共通の利益が生まれるようなとき、コミュニティ自体が「善きもの」となっていくだろう。「善／財」が、「財貨／商品 (goods)」とも関係することは偶然ではないだろう〔石塚・柴田 (2003) p.185〕。

そしてここで、「残酷さの回避」のみならず、未来に向けた「善／財」の創出・共有といったことがテーマとなってくる。被災は、「善／財」の「交換に不具合が起きている」ことを意味するからだ。被災地では、「財産、仕事、福利、幸福のイメージなどが、成員に行き届かなくなっている」〔権 (2016) p.34〕。この点をふまえて以下では、ポスト大震災状況におけるYES工場の事業展開を概観し、その意味や意義を検証する。

2. 廃校活用のさらなる展開：YES工場の事業展開とその意味の分析

先述の通り、もともとは避難所以外の居場所の確保という意味があった廃校活用であり、また無心になって集中できる単純作業・仕事として始まったオクトパス君の色塗り、製造であったが、YES工場の活動はその後、順調に拡大していき、やがて一つの「事業」となっていく。文鎮としてのオクトパス君はもちろん、ストラップやぬいぐるみなど様々な関連「商品」が製造、販売されていく。また、Twitterでオクトパス君の「つぶやき」が開始され、ホームページや各種SNSなどによって、地域内外に向けて情報が発信されてもいる。さらには、かつて養蚕で栄えた南三陸の文化を伝えるための「まゆ商品」事業や、地域の間伐材を利用した「木工商品」事業も展開されるようになった。こうしてYES工場は、地域における雇用と交流の場になっていく。

コミュニティアニズムの見解をふまえるならば、商品がgoodsであることは示唆的である。当初オクトパス君は、被災、避難、悲しみ……といった「残酷さ」を「回避」するために行う作業の対象物であった。だがやがて、それが廃校を活用した工房でgoodsとして製造、販売されていくことを通じて、売り上げや雇用という「財」をもたらしていく。すでに累計販売数は9万個を

超えている〔南三陸復興ダコの会HP〕。また、オクトパス君の認知度が上がることに伴って、南三陸を訪れる人々も増えている。こうして、オクトパス君という goods が製造、販売されること、つまりはそれが分配・交換されることを通じて、南三陸に「共通善／財 (common good(s))」がもたらされていくのである。

だが、それだけには留まらない。興味深いのは、その「共通善／財」が南三陸の人々のみに関係する訳ではない点である。オクトパス君を購入することや、YES工房や南三陸を訪れることを通じて、南三陸を何らかの形で応援する人々が増えていったのである。大学もしくは学生の例を挙げよう。例えば大正大学は、YES工房の立ち上げから現在に至るまで、南三陸に継続して深く関わっている。また立教大学も、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援室が「南三陸交流プログラム」を実施しており、教員と学生がYES工房や南三陸を度々訪れ、地域の人々との「交流」を重ねている。

この立教大学の取り組みは、いわゆる支援型のボランティアではない。むしろ、地域の人々から「コミュニティの紡ぎ直しの仕方を学ぶ」こと、また「地元発という観点・姿勢」を重視することを特徴としている。この点が、プログラムに「交流」という言葉が付されている所以であろう。支援というよりは（あるいは支援でありつつ）交流である。ただし他方で、「結果的に、地元のパワーがもたらされることは期待」されてもいる〔河東 (2016) p.101〕。このような意味で、交流は交換であり、「善／財」の共有に繋がっている〔権 (2016)〕。

以上の点をふまえるならば、大正大学の関係者が、YES工房との関わりについて次のように言っているのは興味深い。「貨幣の交換ではなく、思いの交換というか、応援の交換ということでしょうか」〔YES工房 (2014) p.25〕。また、以下のようなYES工房の「スタッフ一同」の言葉もある。「私たちは、オクトパス君という仲間を通して、日々生み出されるグッズを通して、皆さんと、悲しみと喜びを、希望を、共有しています」〔YES工房 (2014) p.3〕。

もともとは、「悲しみ」という「残酷さ」を「回避」するために製造されたオクトパス君であるが、やがてそれは「商品」となり、「財」をもたらすことになる。あるいは、地域内外の人々に共有される「財」となる。そしてさらには、「喜び」「希望」といった「善」が共有されることにも繋がっている。

Ⅲ. コミュニティの再編成

1. 本稿のまとめ

ここまで本稿は、ローティのリベラリズムと、サンデルやウォルツァーのコミュニタリアニズムに依拠することで、南三陸における震災直後からポスト震災に至るまでの共同関係の展開、あるいは小学校（志津川小学校）から廃校（YES工房）へと至る一連の経緯の意味もしくは意義を明らかにしてきた。ここではそれをふまえて、本稿の考察を、コミュニティの再編成という観点からまとめる。

「Ⅰ章の1節」で言及したように、文部科学省による廃校調査の報告書には、「廃校活用コラム」

があり、そこには次のように記されていた。「明治以来、学校は地域の最も良い場所に作られてきた」。実はこの後には、以下のように続けられている。それ(=学校)は、「地域社会の中心的な存在としての役割を果たしてきたのである。……地域コミュニティの原単位である」〔文部科学省(2003) p.61〕。

志津川地区には志津川小学校があり、入谷地区には入谷中学校がある。そして志津川や入谷は、かつての村の名前でもある。公立小中学校は基本的に学区を持ち、したがってそれは古くからの地縁共同体、地域コミュニティを象徴する公共施設である。東日本大震災は、その地域に大きな被害をもたらすものであった。ただし、確かに地域は大打撃を受けるが、志津川小学校や旧・入谷中学校の場合、学校(廃校)という建物は残り、地縁共同体も完全に喪失した訳ではない。震災後、学校と廃校で、地縁に依拠した共同関係が「残酷さの回避」のために力を発揮したとも言える。

だがその後、YES工房=廃校活用を通じて生成した共同関係は、地縁共同体や地域コミュニティとは違う側面を持っていた。ある商品が製造・販売され、流通することによって、南三陸内外での交流が生まれ、「善/財」が共有されていったのである。そのような意味で、旧・入谷中学校という廃校自体が、地域内外の人々が様々な「善」を共有することを可能とする「財」であり、「善き」空間となっている。

「廃校活用コラム」に戻り、さらに続きを見てみよう。「それは地域コミュニティの原単位である。〔原文改行〕……そのシンボルが失われる。これはつらい」〔文部科学省(2003) p.61〕。地域コミュニティの「原単位」であり、象徴である学校が廃校となることは、もちろんある種の喪失を意味する。またそれは、本稿の冒頭で述べたように、少子高齢化や過疎化といったコミュニティの問題それ自体に起因して発生する。だが他方で、YES工房の取り組みから明らかのように、廃校は「善」を生む可能性をもった「財」でもあった。この点をふまえるならば、YES工房の「地域外の協力者」の一人が次のように言っているのは興味深い。「……オクトパス君とYES工房が復興と再生のシンボルなんだよね」〔YES工房(2014) p.24〕。

学校もシンボルであるが、廃校もまたシンボルとなり得る⁵⁾。もはや現代日本の「風景」ともなっている廃校を拠点としながら〔権(2011)〕、地域内外で「善/財」が共有されていく。このような意味で、かつての地縁共同体に依拠しつつも、またそれとは相違する性質を持ったコミュニティが形成されつつあると言える⁶⁾。

2. 結びにかえて

繰り返すが、廃校の発生は基本的には少子高齢化に起因し、とくに被災地では過疎化という問題と密接に関係している。その状況のなかで、南三陸復興ダコの会事務局長でYES工房の立ち上げに尽力した阿部氏は、交流人口を増加させることの重要性を説き、次のような点に言及している。交流人口の増加は経済効果をもたらすだけではない。様々な人々との関わりから、「地域の人々が勉強して人材として育ち、地域の活力が生まれていく」。もちろん、これは現地の人と

しての見解であり、地域外の人から見ればまた逆も然りということになるだろう。「人材」は「財」でもあり、「善」に繋がる。知識もまた「財」であり、人々の交流や知識の交換は「善」をもたらす。

本稿では、震災時から震災後、そしてポスト震災に至る経緯の意味もしくは意義について、志津川小学校からYES工房の立ち上げとその展開という時間軸にそって明らかにしてきた。今後の課題を挙げるとするならば、展開の後で、それをいかに継続させるのかということになる。その継続のためにも、「善」と「財」の往復運動が重要となってくるのではなかろうか。交流から「善」が生まれ、「財」が結果的にもたらされる。その「財」の交換・分配がまた「善」を生み出し、それが共有されていく。

南三陸町観光協会が発行した観光客向けの冊子には、「トレジャータウン 南三陸」というタイトルが付されている。また、YES工房の広報担当である大森丈広氏は、南三陸の特徴として、「山、海、里がコンパクトにまとまっている」点を挙げている。南三陸にはその全てがあり、訪れる観光客がそれらを体験することができる。人々の交流を通じた「善／財」の交換が継続化することで、地域の様々な「善／財」が（再）発見されていく可能性がある。

【注】

- (1) 本稿は、2016年度立教大学コミュニティ福祉研究所学術推進資金・企画研究プロジェクトⅢ「被災地における廃校活用を通じたコミュニティの再編成：新たな公共性の創造」（研究代表者 権安理）の研究成果の一部である。
- (2) YES工房及び南三陸町における現地調査の際に行われたヒアリングは、以下の通りである。2015年6月に立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援室「南三陸プログラム」（引率代表：河東仁教授）実施の際に行われた、南三陸復興ダコの会事務局長の阿部忠義氏によるレクチャー。2016年8月及び11月に、立教大学コミュニティ福祉研究所学術推進資金・企画研究プロジェクトⅢの調査の際に行われた、YES工房広報担当の大森丈広氏及びスタッフの方々に対するヒアリング。ご尽力、ご協力頂いた関係者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。
- (3) サンドルが東日本大震災を扱った講義を記録した著書〔Sandel and Kobayashi (2011) = (2011)〕には、「日本の人びとが表した美德や精神が、世界にとって、大きな意義を持った」と記された「帯」が付いており、その最初のテーマは「日本人が見せた混乱の中の秩序と礼節」である。ただしサンドルが、この講義を通じてナショナリズムの重要性（のみ）を極端に強調している訳ではない。
- (4) もっともローティは、別稿で「ナショナル・アイデンティティ」や「ナショナル・プライド」を擁護し、国家を変革するにはそれが不可欠であると（明らかに過剰に）語ってはいる〔Rorty (1994)〕。この点に関して、例えば辰巳伸知は「ほとんど恫喝」と批判し〔辰巳 (2000) p.251〕、逆に渡辺幹夫は「高度」な「民主主義を実現する」ための「意志」の表明であると擁護する〔渡辺 (1999) p.324〕。私見では、国家愛・国民愛が国家を改良・変革するための条件であるという主張は、いわゆる右派やナショナリストが使う典型的な詭弁である。ただし、本稿はこの論争には立ち入らず、ローティのリベラリズムを考える際には、Rorty (1989) = (2000) に依拠する。
- (5) W・ベンヤミンの見解をふまえるならば、廃校にはシンボルというよりもむしろアレゴリーとしての機能があるとも

考えられるが、それについては、権(2011)で詳細に論じた。

- (6) YES工場の活動から派生したもので、休耕地を活用した農業の取り組みである「農工房」がある。この名称は、もちろん「YES(はい)」に対する「NO(農)工房」に由来する。先述の「さんさん館」もそうであるが、南三陸には、「廃校」「間伐材」「休耕地」といったものを、「善/財」に変換する様々な取り組みがある。

【参考文献等】

- 青木栄一(2015)「学校教育における迅速な復旧」, 青木栄一編『大震災に学ぶ社会科学第6巻 復旧・復興へ向かう地域と学校』東洋経済。
- 権安理(2011)「批評の対象としての廃校——廃校の風景をめぐる」, 仲正昌樹編『批評理論と社会理論 1: アイステーション』御茶の水書房。
- (2016)「『善きこと』の交換、分配、交流——『コミュニティ支援』を概念から考える」, 立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援室『復興支援ってなんだろう? 人とコミュニティによりそった5年間』本の泉社。
- 石塚正英・柴田隆行監修(2003)『哲学・思想翻訳辞典』論創社。
- 河東仁(2016)「コミュニティの紡ぎ直し先進地に学ぶ」, 立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援室『復興支援ってなんだろう? 人とコミュニティによりそった5年間』本の泉社。
- 菊池理夫(2011)『共通善の政治学: コミュニティをめぐる政治思想』勁草書房。
- 文部科学省(2003)「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書」文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/03062401/houkoku_fm1.htm. (2017年1月10日閲覧)。
- (2011)「東日本大震災に関連した廃校施設の防災機能について」『廃校施設等活用状況実態調査について』文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/09/_icsFiles/afieldfile/2011/09/16/1311255_1_1.pdf. (2017年1月10日閲覧)。
- (2014)『廃校施設等活用状況実態調査の結果について』文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/11/_icsFiles/afieldfile/2014/11/13/1353354_1_1_1.pdf. (2017年1月10日閲覧)。
- Rorty, Richard (1989) *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press. = 齋藤純一ほか訳(2000)『偶然性・アイロニー・連帯: リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店。
- (1994) "The Utopian Academy," in *The New York Times* (13 Feb. 1994).
- Sandel, Michael J. (1996) *Democracy's Discontent: America in Search of a Public Philosophy*, Belknap Press of Harvard University Press. = 千葉大学人文社会科学研究所公共哲学センター訳(2010; 2011)『民主政の不満: 公共哲学を求めるアメリカ』上・下, 勁草書房。
- (2009) *Justice: What's the Right Thing to Do?* Farrar, Straus and Giroux. = 鬼澤忍訳(2011)『これからの「正義」の話をしよう: いまを生き延びるための哲学』早川書房。
- (2011) *Special Lecture on Japan Earthquake with Michael Sandel*. = NHK「マイケル・サンデル 究極の選択」制作チーム編(2011)『マイケル・サンデル大震災特別講義: 私たちはどう生きるのか』NHK出版。
- Sandel, Michael J. and Masaya Kobayashi (2011) *The Art of Dialogical Lecture of Michael Sandel*. = 小林正弥監修(2011)『サ

- ンデル教授の対話術』NHK出版.
- Solnit, Rebecca (2010) *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*, Penguin Books. = 高月園子訳 (2010) 『災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』垂紀書房.
- 辰巳伸知 (2000) 「訳者解説——アメリカ的愛国主義とその外部」『国を愛するという事』人文書院.
- Walzer, Michael (1983) *Spheres of Justice: A Defense of Pluralism and Equality*, Basic Books. = 山口晃訳 (1999) 『正義の領分：多元性と平等の擁護』而立書房.
- (1987) *Interpretation and Social Criticism*, Harvard University Press. = 大川正彦・川本隆史訳 (1996) 『解釈としての社会批判：暮らしに根ざした批判の流儀』風行社.
- 渡辺幹夫 (1999) 『リチャード・ローティ：ポストモダンの魔術師』春秋社.
- YES工房 (2014) 『YES FACTORY』YES工房事業報告書.
- 南三陸町観光協会「トレジャータウン 南三陸」
- 南三陸復興ダコの会ホームページ, <http://ms-octopus.jp/project/introduce.html>. (2017年1月10日閲覧).
- 三菱商事復興支援財団ホームページ「focus37南三陸が注目を集める一助であり続けたい」, <http://mitsubishicorp-foundation.org/reconstruction/interview/focus37.html>. (2017年1月10日閲覧).